

新潟県立近代美術館便り

雪 椿 通 信



第24号

2005.4

県民の美の財産Ⅲ 作品をひもとく “ビブリ”ってなあに? 獅子の正体は若い女性!?

2005年4月23日(土)～6月5日(日)

新潟県立近代美術館が開館して12年。美術を愛する県民の皆さんにはこの間に何度か美術館に足を運んでいただき、すっかりお馴染みになっている作品もあることと思います。でも、私たち美術館職員としては、作品についてもっと知ってもらい、私たちの県のお宝に一層愛着と誇りを持っていただきたいと思っています。

例えば、所蔵品の中でも展示頻度の高いカラー作の《ビブリ》。カラーは、バルビゾン派の画家として知られています。バルビゾン派といえば、自然をありのままに描いた絵画の創始者たちですから、この風景の美しい空の色や森の表現に魅せられている人も少なくないと思います。しかし、タイトルの《ビブリ》は地名などではなく人の名前です。この絵は、そのビブリという名の少女を主人公とした物語を描いたものなのです。このことを知っている方はどのくらいいらっしゃるでしょうか。

バルビゾン派の画家たちは、自然の風景そのものを愛しましたが、カラーは少し方向性が異なり、風景の中に文学や詩情を盛り込んだことが特徴でした。ですから、風景の美しさだけでなく、ここに描き込まれた物語のシーンにこそ、カラーの作品ならではの真価があるといえるでしょう。ビブリのお話は、『変身物語』(紀元前の詩人オウィディウスによるギリシア・ロ

ーマ神話集大成)による悲恋の物語ですが、その詳しい内容については展覧会で詳しくひもとくことにしましょう。

また「物語」といえば、日本画家錦木清方の作品は、その多くの題材を歌舞伎から取っています。歌舞伎やそこで取り上げられる物語に詳しい方は、現代人には意外に稀なのではないでしょうか。しかし、絵の背後の物語を知っているのといえないのでは、絵をみる楽しみは格段に違うことは想像に難くないですね。

例えば、『鏡獅子』はよく耳にするタイトルですし、獅子の白く長い髪を豪快に振る髪洗いの様子はよく知られているでしょう。しかし、実際の物語の詳しい筋は御存知でしょうか。あの勇猛な獅子は、実は獅子の精に取り憑かれた弥生という名のうら若き女性なのです。

このように、この展覧会では、上に紹介した物語だけではなく、技法について、材料について、あるいは来歴について、またあるいはたった1点の作品のかけに隠されている膨大な準備やエピソードについて——様々な作品の秘密を、より詳しく、わかりやすくひもといていきます。

この展覧会を通して、皆さんが県民の美の財産である新潟県立近代美術館の所蔵品により深い愛情を持っていただけるようになればとても嬉しく思います。

(主任学芸員 宮下東子)

重要文化財指定二十五年・県指定文化財五十一年記念 良寛遺墨展——御三家を中心に

2005年7月16日(土)～8月21日(日)

良寛遺墨展を県立美術館としては、四半世紀ぶりに開催いたします。

良寛を慕う人たちは、新潟県だけでなく全国に広くおり、良寛が残した思想、詩歌、書など、それぞれその足跡を敬愛しておられます。当館では、そのうちの県内に残る数々の遺墨を中心に焦点をあてて開催いたします。

良寛遺墨は今日まで各家で大切に保管され、数々の名品が残っています。特に良寛を支援し、また、交友を深めた縁深い諸家が県内中越地方にありましたが、中でも、分水町の阿部家、解良家、和島村の木村家は、御三家として知られています。

阿部家は、酒造業を営み、また代々庄屋役を務めていました。七代目定珍は家業のかたわら江戸に遊学するなどして詩歌を好くし、良寛と深く親交を加え、多くの唱和した秀歌を残すなど、物心両面で良寛と縁が深い家です。

解良家は、豪農の一つでやはり代々庄屋役を務めていました。第九代栄明から第十三代栄重に渡って良寛と親しくし、十代目の栄繩(叔間)は学問を好み、家に漢学や国学の学者を招聘したりし、良寛と深く関わりました。また栄重は「良寛禅師奇話」を書き残しています。

木村家は、第十一代元右衛門(利藏)が老齢の良寛を引き取り、扶養し、入寂を看取りました。隣接の菩提寺隆泉寺の木村家墓地に墓を建てています。また元右衛門は先代の遺志を継ぎ、

同寺に一切経六七七巻とその経藏を寄進しますが、その由来の札を良寛が記しています。

こうした縁深い御三家に残る良寛遺墨は、まさに新潟県の誇る貴重な文化財として、昭和29年(1954)にまず新潟県の文化財として指定されていましたが、昭和55年(1980)このうちの阿部家のものが重要文化財として国に指定されました。この年は良寛没後百五十年で、当館の前身新潟県美術博物館で展覧会が開かれましたが、県立施設では久しく展覧会は開かれてきませんでした。また、五年前に開催された良寛没後百七十年の展覧会では、御三家の遺墨が久しぶりに九点並べられましたが、新潟での開催はかないませんでした。

そこで県指定から半世紀、国指定から四半世紀経つ本年、この我が県の誇る貴重な良寛遺墨を御三家の御協力はもとより、市町村指定されている遺墨や未指定ながらも残る名品を各所蔵家の並々ならぬ御厚情、御協力をいただき、地元新潟の地での良寛遺墨展の開催が実現することになりました。御三家の遺墨が二十八点と、ここまでまとまり、また『いろは 一二三』『草庵雪夜作』『題蛾眉山下橋杭』など、各家で大切に守られてきた数々の名品遺墨も一堂に会し御覧いただける、まさに稀有な機会と思います。新潟の誇る文化財、良寛遺墨の粋を御覧いただけます。

(主任学芸員 松久国憲)



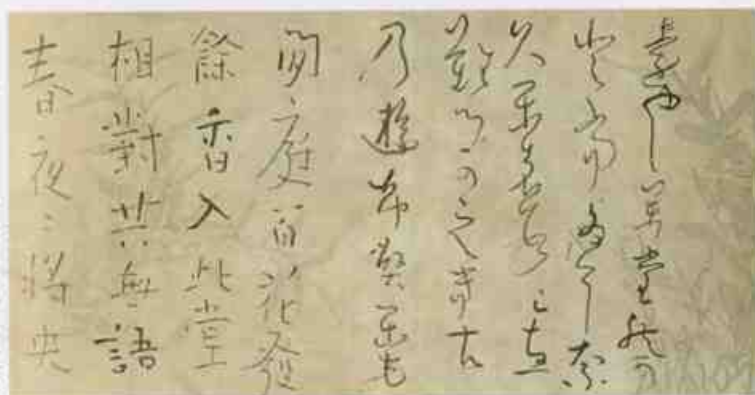
中村耕 (美濃義郎氏の肖像)
1919(大正9)年
—モダルの製作をひもときます—



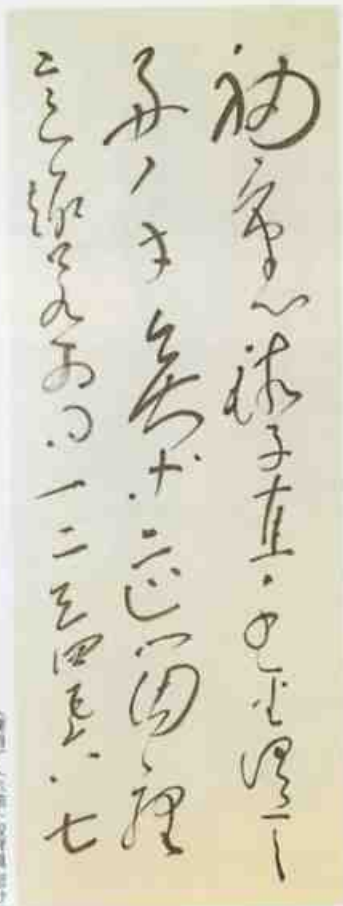
カミーユ・コロー (ビブリ) 1874-76年



オーギュスト・ロダン
(考える人) 1880年
—考えるポーズをひもときます—



〔日本書道展覧会〕
中村耕 (美濃義郎氏の肖像)



〔書道展〕
中村耕 (美濃義郎氏の肖像)



〔書道展〕
中村耕 (美濃義郎氏の肖像)

あしあと

特集：新潟県中越大震災

2004年10月～2005年3月

去年の中越大震災では、皆さまに大変ご心配をおかけしました。その時、その後の美術館の様子をご報告します。



震災当夜、屏風転倒（展示室1）



震災当夜、ハンガー飛び出しています。（収蔵庫2）



10月26日 研究室

落谷虹児展

—少女達の夢と憧れ—

10/9(土)～11/23(火)の筈でした…



10月17日 日 イベント「きもので楽し」

- 10月23日(土) 通常開館 <企画展> & <常設展>
14:00～15:30 講座「落谷虹児～作品とその人生」
(担当：小西学芸員)
17:00 閉館
17:56 中越大震災 長岡震度6弱 (M6.8)
この晩震度5強～震度4の余震6回
職員美術館到着。安全確認の後、館内(展示室、収蔵庫等)の点検を行いました
18:30～

被害状況のまとめ

- 建物本体 …………… 構造的・空間関係などは問題なし
外壁にひび、タイル剥落など
- 作品被害 …………… 回廊に展示中のガラス製花器1点が破損
工芸作品1点に亀裂。屋外彫刻1点の
溶接の接合部分がはずれる
エントランスのロダン作品を固定している、めどめの部分に浮き
- 展示用具 …………… 作品表面のヒートン(金具)のとれ・曲がり。
額面の破損、ずれ、ネジ落ち作品をラックにかけるフックの伸び 等
- 外構部分 …………… 駐車場地面に割れ、波うち 等

- 10月24日(日) 活発な余震を警戒し29日(金)までの閉館を決定しました
10月25日(月) 朝6時4分、震度5弱の余震発生。展示中の作品の収蔵庫への移動と、HP上に情報提供を始めました
10月26日(火) 開館予定を延期し、4日(木)までの閉館を決定しました
10月27日(水) 午前10時40分、震度5強の余震発生。さらに長岡を最大震度地とする震度4の余震2回
11月3日(木) 業者による建物施設点検
11月4日(金) 通常勤務が再開。8時57分に震度4の余震。5日の開館予定を再検討することに
11月5日(金) エントランス・ホール周辺の点検・修理。来館者を迎えるに支障が無いことを確認し、7日(日)から開館することに



「落谷展」 残された貴重な写真。 一瞥念!

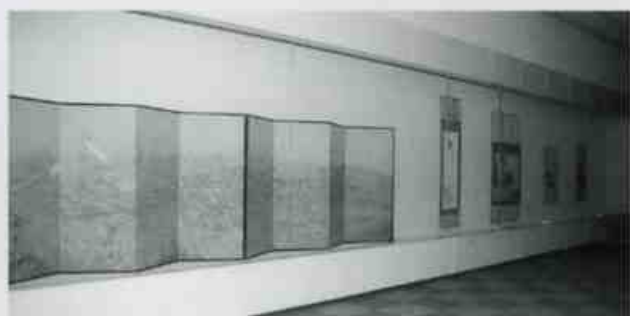
- 11月7日(日) 通常開館 <企画展>&<常設展>
- 11月8日(月) 休館日。常設展の展示替え作業中に**震度4**
さらに**長岡を最大震度地とする震度4の余震**
11日(木)までの閉館と「落谷虹児展」の中止を泣く泣く決定
再び作品を収蔵庫に避難させました
- 11月10日(水) 早朝3時43分、**震度4の余震**発生
- 11月11日(木) 常設展示室、余震にそなえて展示内容を一部変更した上で復旧作業
- 11月12日(金) 通常開館 <常設展>のみ再開。とにかくにも、元気出していこう!!

県民の美の財産Ⅱ

日本美術の歩み

～近代から現代へ～

2005年 1/25(火)～3/21(月)



企画展示室 再開です!!

併設:

いきいき中越っ子展

2/9(水)～2/27(日)

呼びかけに応じて、中越の小中学生の作品が
4000点近く集まりました。
3期に分けて館内中に展示しました。



こちら「生命の木」作成中



被災地の子どもたちの元気な作品を見て下さい!

この催しにはのべ200人以上に
およぶボランティア、および地
元企業、組織の篤志をいただき
ました。



皆さん、本当にありがとう!

おまけ...

2月1日(日) なんと19年ぶりの大雪
積雪152cm (まさに泣きっ面に録)



まだ雪降りやまず
負けなぞ!

写真: 松矢学芸員
身長163cm

昨年秋の講座で3回ほど運慶の仏像を話題にしました。その時にお話したことのうちから運慶と工房製作の問題について書いておくことにします。

運慶が青年時代、おそらく25才前後のころに造った奈良円成寺大日如来像の台座の銘文は、運慶の自署を伴う点で造像銘記史上に画期的な意味を持つことは既に述べました。この銘文でもう一つ注目されるのは、この像を安元元年(1175)11月24日に造り始め、翌2年10月19日にお寺に渡し奉ったとあり、完成まで11ヶ月もかかったとわかることです。この像は高さ98.2cm、等身大の坐像ですが、当時これと同じくらいの大さの仏像は彫刻と表面の漆箔などの仕上げを含めて、およそ二ヶ月から三ヶ月もあればでき上るのがふつうでした。この像の完成までに異常に長い期間を要したのは、何か特殊な事情があったのかも知れませんが、像の細部に至るまで神経の行届いた、みごとな彫りは、まだ若い運慶が独力で、隅から隅まで精魂こめて彫上げたのではないかと想像させます。それだけできのよい像で、ここに運慶の彫刻的才能が十分に発揮されているといつてよいと思います。

運慶の次の遺作は文治2年(1186)に北条時政のために造った伊豆願成就院の諸像です。ここでは阿弥陀三尊、不動明王と二童子、毘沙門天の諸像を造り、いま阿弥陀の脇侍菩薩は失われています。このように一度に多数の像を造る場合、いつまでという期限がありますから、運慶が一人で造っているのではとても間にあいません。当然一門の仏師達が手分けして造るわけです。果して文治5年、和田義盛のための横須賀市浄楽寺阿弥陀三尊・不動明王・毘沙門天の造像では、仏師運慶と小仏師十人が働いていたことが銘札に記されています。このような一門の仏師達によるいわば工房製作は、大量の造仏が行われた平安時代からももちろん行われていたことです。大仏師は群像の中心的な仏像にかかると同時に、小仏師達が分担造立する全体を統括するわけです。

そうすると群像全体としてのできばえは、小仏師の腕によっても左右されることとなります。大仏師の意図を十

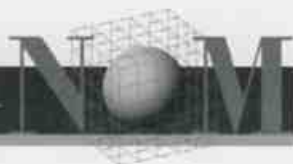
分に理解し、それを表現できる腕のある小仏師達の手が揃っていることが理想です。運慶についてはその問題はどうかだったのでしょか。まず願成就院と浄楽寺の場合について考えてみましょう。たとえば挿図に出した二体の不動明王像を較べてみます。願成就院像の方は鼻先が後補でおかしな形になっていますが、耳は大変ダイナミックな、のびのびした感じのつくりで、円成寺大日如来像の延長上にあります。耳の前にたれる髪も自然なカーブを描いて柔かい。一方の浄楽寺像の耳は大分形がちがひ、少しくずれた感じがあるし髪にしても硬さがあります。このような違いは中尊の阿弥陀如来像を較べても、他のすべての像についてもいえます。願成就院像ではかなりの程度に運慶の手が見えるが、浄楽寺像の方ではそれがあまり見えない。この違いはどうしてなのか。東国武士のための初めての造像である願成就院では、運慶は思いきって新しい様式を打出した。もちろん小仏師も働いたけれど、斬新な構想を実現するためにはすべての像にわたって運慶自身がかんがひの程度に手を下さなければならなかったのではないかと。これに対して浄楽寺の場合はもうレシビが完成していて小仏師に多くをまかせたのだらうと思います。しかもこのときは父の康慶が主宰した興福寺南円堂の造像と重なり、一門の主な仏師はそちらで忙しく、運慶が浄楽寺の方に使えた自身の弟子はまだ手が揃っていない時期だったのでしょか。これ以後、運慶工房が次第に充実していくさまについては、次の機会に述べたいと思います。



願成就院不動明王像



浄楽寺不動明王像



■日本の美術

- 大野俊明《京都》(1998) 日本画 作者寄贈
 深澤索一 木版27点 深澤不二人氏寄贈
 《瀟風景》(1924) 《風景》(1925) 《代々木風景》(1925)
 《風景》(1926) 《山村暮趣》(1926) 《切通》(1927)
 「港」第四号表紙原画(1927) 《港》(1927) 《港街》
 (1927頃) 《詩人の散歩》(1927) 「新東京百景」築地
 (1929) 《蕉》(1929) 《果实》(1929) 《柿》(1932)
 《郊外》(1932) 《樹木》(1932) 《洋館》(1932) 《切り通し》
 (1932) 《切り通し》(1932) 《冬》(1932) 《静物》(1932)
 《築地風景》(1933) 「新日本百景」裏富士(1939) 《鯨》
 (1946) 《花》《静物(わらびと筍)》《栗》
 下沢木鉢郎《深澤索一肖像》木版 深澤不二人氏寄贈
 深澤索一 挿絵原画 12点(1946) 深澤不二人氏寄贈
 深澤索一「新智識」表紙原画 水彩 深澤不二人氏寄贈
 「HANGA」第一輯(1924.2.1発行) 深澤不二人氏寄贈
 「HANGA」第九・十輯(合輯)(1926.7.5発行) //
 「HANGA」第十一輯(1926.11.5発行) //
 「版藝術」第一年第四号(1932.7.1発行) //
 *上記4冊の内、木版29点、木版[資料]16点
 作者不詳(題不詳) 木版[資料] 深澤不二人氏寄贈
 深澤索一 木版5点 10周年記念新潟県立美術館友の会寄贈
 《風景》(1925) 「新東京風景」京橋(1932)
 《冬日》(1924) 《樹》(1932) 《花籠》(1932)
 深澤索一 木版[資料]4点 10周年記念新潟県立美術館友の会寄贈
 《小丘》(印刷・1928) 年賀状(1927)
 年賀状(畦地梅太郎宛・1928) 絵葉書
 郭徳俊《フォードと郭》(1975) リトグラフ 作者寄贈
 松永真 ポスター65点(1971-2004) 作者寄贈

- 服部一成 雑誌[資料]25冊 亀倉雄策賞事務局寄贈
 『流行通信』(2002.9-2004.8)(24冊)
 『流行通信 Extra issue "GRAPHIC"』
 日本画[資料]4点 杉山寛治氏寄贈
 後藤純男《新雪塔映》上村淳之《紅ヒワ》《鶯》
 清水規《富岳》

■新潟の美術

- 三輪晃勢 日本画5点 三輪晃久氏寄贈
 《草の上》(1947) 《アダチオ》(1949) 《街》(1951)
 《黄色い椅子》(1956) 《ボンベイの女》(1967)
 小島丹彦《待つ》小下図7点(1965頃) 原武子氏寄贈
 星兼雄《階段のある一変容・Ⅲ》(1981) 油彩 作者寄贈
 市橋敏雄 工芸4点 作者寄贈
 《艶容〔噴水〕オーバルコンポジション》(1965)
 《桃源の夢》(1976) 《吹分オベリスク 南冥の鎮魂碑》
 (1995) 《蠟型青銅パネル 風林花山》(1997)
 堺時雄 写真47点 遺族寄贈
 堺時雄 紙焼写真、ガラス原板等[資料] 遺族寄贈
 日本画[資料]4点 杉山寛治氏寄贈
 番場春雄《山村雪晴》山崎隆夫《花菖蒲》白井進《杜》
 柴田長俊《白雨》(1993)
 油彩[資料]2点 杉山寛治氏寄贈
 中山彌郎《阿賀野川》猪爪彦一《風景》(1987)
 牧野廣園(廣吉)《洲崎義郎肖像》(1991) 木彫[資料]
 洲崎淑氏寄贈

研究室より — 念願かなう！

中村彝、洲崎義郎宛書簡100通を収蔵

この度、念願かなって中村彝、洲崎義郎宛書簡100通を収蔵することが出来た。いうまでもなく中村彝は大正の美を代表する画家。一方の洲崎はと言うと、大正3年、彝と出会って以来、物心両面で病弱の画家をその死まで支えし美術史に名を残す柏崎の人。

100通の書簡は大正5年1月から13年12月にわたる。その中には彝の制作への思い、日常生活の周辺、赤裸々な恋愛への真情告白、時には洲崎への物資の無心までが素直に綴られて多感で情熱的な一人の画家の素顔を伝える。また、二人の共感と慈愛に満ちた交友の軌跡も辿れ、彝と柏崎の関わりも詳かた。中村彝研究の一級資料であると思う。

当館では中村彝が大正8年に描いた《洲崎義郎氏の肖像》を所蔵している。この作品制作のいきさつがわかる書簡も今回収蔵できた。100通の書簡類は、今後ことある毎

に紹介していきたい。手始めに、4月23日(土)から開催予定の拡大所蔵品展「作品をひととく」に展示予定である(2-3頁参照)。なお、「書簡」全体については、「中村彝展」カタログ(新潟県立近代美術館 1997年)に詳しく紹介してある。

(学芸課長 小見秀男)



大正5年2月28日付 中村彝、洲崎義郎宛書簡

イベント情報

4月～8月

●企画展

4/23(土)～6/5(日)

「県民の美の財産Ⅲ 作品をひもとく」

<関連イベント>

5/8日「楽しく答えてあなたもコレクション通!」

5/8を除く毎週日曜日 学芸員による解説会

7/16(土)～8/21(日)

「良寛遺墨展——御三家を中心に」

<関連イベント>

会期中に講演会・当館学芸員による講座等を予定

●所蔵品展示

第1期 4/1(土)～6/26(日)

前期:5/15(日)まで 後期:5/17(火)から

展示室1 岩絵具と油絵具

展示室2 静かで小さな動物園

展示室3 ザ・すわる! ...プラス深澤索一

第2期 7/1(土)～9/25(日)

前期:8/21(日)まで 後期:8/23(火)から

展示室1 良寛をめぐる人々(前期)

近現代の宗教表現(後期)

展示室2 文字と言葉

展示室3 子どもの世界

●県展

6/11(土)～19(日)

●ワークショップ

「びじゅつ☆探検隊」

5/3(火・祝) 自由につくろう(フリー)

8/14(日) 大きな字をかいてみよう!

「発見!びじゅつかん」

7/17(日) <シリーズ展示の秘密>

ゆれない秘密—地震に備えて—



荻々木康宗(緑銅色紅銅彫像)
1940(昭和15)年(第1期/展示室2)



加山又造(白雲と小鳥)
1961(昭和36)年(第1期/展示室1)



エミール・ノルデ
(若く少女) 1907年
(第2期前半/展示室3)

○万代島美術館情報

■7人の新潟の写真家たち

開催中 ～4/25日

■田園と都市～暮らしの情景

4/29(金)～6/26(日)

■地球を生きる子どもたち

7/2(土)～9/4(日)



ルイス・W・ハイン(製氷工の少女) 1908年
アメリカ ニューイングランド地方
Courtesy George Eastman House
(地球を生きる子どもたち展)

The Niigata **Bandajima** Art Museum
新潟県立万代島美術館

〒950-0078 新潟市万代島5-1
(朱鷺メッセ内 万代島ビル5F)
TEL:025-290-6655 FAX:025-249-7577
ホームページ www.lalacet.gr.jp/banbi/

表紙作品解説

深澤索一 《詩人の散歩》 1927(昭和2)年 多色木版

浅彫りの黒色の表現に表現主義の影響が残っていますが、かつて表れていた不安感や危機的意識を感じさせるうねる空気や大地の線は、ここにはもうなく、すっかりと全ての地面や空が寄り込まれ、白くぬけた明るい空間になっています。こうした単純に整理された表現から、西洋の美術思潮から脱し始めた索一の制作姿勢の変化が窺えます。図を作る際、普通省略されそうな電柱が二本、遠くのものには影となって描かれ、この時期の時代相が感じられます。また、愛嬌のある後ろ姿の人物が描きこまれることで単なる風景版画ではなく、和んだ空気が漂う親しみのある作品に仕上がっています。平成16年度深澤不二氏寄贈。

新潟県立近代美術館便り 雪椿通信 第24号

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館

〒940-2083 新潟県長岡市宮前町字堤通278-14 TEL 0258-28-4111(内) FAX 0258-28-4115
<http://www.lalacet.gr.jp/kinbi/index.html> e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

制作・印刷 株式会社 中央印刷(〒940-0041 長岡市学校町1-9-2) TEL 0258-35-3500

発行日 平成17年4月1日<4000部>

利用案内

■開館時間/午前9:00～午後5:00

観覧券の販売は午後4:30まで

レストラン/午前10:00～午後5:00

キラストオーダー(食事) 午後4:00

(飲物) 午後4:30

ミュージアムショップ/午前9:00～午後5:00

■休館日/毎週月曜日

ただし7/18は開館し、翌7/19休館。
6/27(月)～30(木)は保守点検のため休館。

■観覧料金

●企画展

企画展によって観覧料が異なります。
なお、企画展の観覧券で、展示室1・2・3もご覧になれます。

●展示室1・2・3

■一般/410円(330円)

■中等教育(後期)・高校・高等専門学校/200円(160円)
*学生証を提示してください

■小学・中学・中等教育(前期)/100円(80円)

* ()内は20名以上の団体料金です。

* 小・中学生は土・日・祝日の観覧料が無料になります。